

第三章 学園をめぐる人物像

師影 点描

太田達人先生



おとつあん先生

遠藤 貫中 (旧1回生)

開校当初から三年の間、岩手中学校にて数
学担当の達人先生は温厚端正な態度で生徒に
接した方だった。和服と袴で教壇に立たれた
り、数式の板書も乱れた数字一つお書きにな
らなかつた。先生は、秋田、横手、樺太の中
学校長を経て本校に赴任された。文豪夏目漱
石は、高等学校・大学時代(旧制第一高等学校、
東京帝大)を通じて太田先生と親しい友人で

三田義正翁は「師弟の真の心の触れ合いが存在するのは私学であ
る」という考えを持ち、よき師を求めることにこのほか心を用い
た。こうした校史七〇年の「師の森」に分け入れれば芒芒として定め
がたいが、ここに幾つかの師影を求めて綴ることにする。

あり、その作品「硝子戸の中」で先生を回想
し、その風貌性格を次のように述べている。
「〇は東北の人だから、口の利き方に私な
どと違った鈍でゆつたりした調子があつた。
さうして其調子が如何にも能く彼の性質を代
表してゐるやうに思はれた。何度となく彼と
議論をした記憶のある私は、遂に彼の怒つた
り激したりする顔を見る事が出来ずにしまつ
た。私はそれ丈でも充分彼を敬愛に價する長
者として認めてゐた。」「赤い頬と丸い眼と、
同じく骨張らない輪廓の持主ではあるが、」
「私は彼を想ひ出すたびに、達人といふ彼の
名を考へる。すると其名がとくに彼のために
天から與へられたやうな心持になる。さうし
て其達人が雪と氷に鎖ざされた北の果に、ま
だ中學校長をしてゐるのだなと思ふ。」

(「硝子戸の中」大正四年作)

以上が漱石作品からの抜粋であるが、達人
先生岩中に在職中の異変を石桜五〇年史より借
用して結びといたしたい。漱石も見たことも

なかつたのだが、達人先生は一度だけ激怒し
たことがある。それはうそをついた生徒に対
し、「師をあざむくとは何事か、おとつあ
んを連れてこい」とどなったのである。それ
まで「さむらい」だったあだ名が以後「おとつ
あん」に変わった。

気骨の人

斉藤久四郎 (旧1回生)

太田達人先生と言えはすぐ思い出します。
昔人で気骨ある先生でした。私は当時やんちゃ
坊主でしたので、代数の授業時間で先生が一
生懸命代数の説明をしておられるのに私はほ
お杖をしながら半分居眠りをしていたところ、
先生から「おい斉藤」と指名を受け、さつそ
く黒板に行き、出された問題を説明にかかり
代数の問題を解き黒板に書いたのです。そう
すると太田先生がよく出来たとほめてくれた
ので自分ながらも驚いた次第でした。

本当に当時の先生としては気骨のある先生でした。今も忘れられず思い出されます。昔々の思い出です。

南部五郎先生



師を偲びて

松見得明（旧一回生）

今年も（平成5年）早や十一月、来月は歳末を迎えることになりました。一年なんてアツという間です。これということもしていないのに不思議に思います。

ところで去る一〇月一六日、東京石桜同窓会に出席した折、物故者追悼の黙禱に際して、南部五郎先生の名があげられ驚きました。帰盛してすぐ太田代君に連絡し、ご遺族へお悔み申しあげると共に別紙弔詞に添えてご香料として金一万円、お供物に盛岡駄菓子一箱をお送りしました。

先生は昭和三年三月赴任ですから私達が三年生になった春から英語を教わったのでした。だが、どうしたわけか翌年八月には離任されて僅か二年有半のご縁にすぎませんでした。

けれどもモダンきうりとアダ名して馴れ親しんだ先生でした。皆さんそれぞれに懐かしい思い出をもっていることと思います。このような前にもう一度お会いしたかったと悔やまれとなりません。ご冥福を念じてあげて下さい。

以上南部先生のご逝去について記しました。が近く石桜会報が発行されることになり、私にも何か一文をとめられましたので南部先生のことに因んで「同級会」と題して寄稿しておきました。会報十四号はいささかしめつぱいものになりましたがそれだけに南部先生の追悼を主にしたつもりです。

寒さに向かう折からくれぐれも用心堅固にして新春をお迎えください。

石桜第一回生同級会々報（十四号）より

亡き師と語る

先生しばらくでした。お元気でなによりです。と申しあげたかったのに残念至極です。いくらご高齢でも、また、よしんば病床にあられるとしてもとにかくご存生でさえおられればただそれだけで心満たされていられたのに、寂しいことです。

先生はいつもニコニコしておられついで怒ったことがありませんでした。私達悪童どもは何とかして怒らせてみたいものだ、あれこれ悪戯を試みたものでしたが、先生にはその下心がわかっておられたらしく、いつも肩透しをくわされたものでした。

ところで先生、先生のアダ名は何だったか知っておいででしたか。「モダンきうり」というのです。どうしてそう言うアダ名を奉つ

たのかわかりませんが。多分先生がモダンで華奢な容姿をしておられたことによるものではないでしょうか。たしかに先生は都会的でモダンでした。素朴で無骨な田舎育ちの私達にはそうした印象がありましたし、スマートなスタイルはすらりと伸びたキウリのでもあつたようです。だから先生のアダ名は野卑で土臭いものではなく都会的でモダンなセンスを狙った苦心の作だともいえるのではないのでしょうか。

在学中の思い出を数えればきりがありませんが、卒業してからはお互いそれぞれの道を歩み、会う機会もないままに歳月を費やしてきたのですが昭和五六年夏、卒業してから五〇年になるのでそれを記念しての同級会ということになり、つなぎ温泉にその当時お世話になった先生方をご招待し南部先生、広嶋先生、広野先生においでいただきました。その頃先生方は東京に、大阪に、仙台にとお住いでしたが遠路お厭いもなくおいで下さり一同に会し得ました。その時の私達の喜び、先生方のご満悦、温泉につかり背中を流してあげた愉しき、あの時の感触は今でも忘れられません。それは岩手中学校創設時代を荷なつて情熱を燃やしつづけた先生と生徒であつたからこそその歓喜であり悦楽であつたと思えます。

あれから十余年、先に広嶋先生をそして今先生をお送りすることになりうたた哀惜の情禁じえないものがあります。

今年のお正月にはご年賀状をいただきましたがこれからはいただけません。

寂しいことです。いやそれよりこちらから差し上げる先生がおられないという心の空白が年ごとに深まってゆくことでしょう。先生どうして下さいますか、そうは言っても私達もやがて先生のあとに続くことになりました。私達の入る教室を用意しておいて下さい。お願い致します。ではいずれまた。さようなら

北住敏夫先生



若はげさんのこと

鱧沢 昇 (旧13回生)

私どもが先生に国語を習ったのは、中学一年の時であった。田舎から出て来た私は国語の中で文法を教わり、国語にこういうものもあつたのかと、今風に言えばカルチャーショックとも言うべきものを感じた。(英語は中学に入れば習うものという観念が既にあつたからシヨックにならなかつた。)

実は私が約一〇年ほどして高校教師をやることになったが、そのモデルは国語では北住先生であり、漢文ではピンと髭の生えた龍澤先生であつた。

北住先生は当時二六、七歳ぐらいであつたらうか。眼鏡をかけた背の余り高くない学究肌の人であつた。教科書を口元に近付け横を向いて笑う姿が印象的であつた。

一年の私どもは、圧倒的な上級生(二年(五年まで)に小さくなつていたので、授業で先生に会うとホツと心が休まるような思いをしたものだ。今でいうストレス解消と言うのであろうか。その調子に乗つて先生を「若はげ」と「さん」も付けないで、最も気にしているところを突いて、声高く叫んだものだ。

先生は大正元年、三重県津市の生まれで、三重県立津中学校を修了して第三高校へ。

(官立旧制高校で京都にあつた。四年修了からというのは相当の力がないと合格出来るものではない) ついで東北大法文学部に進み、文芸学で鳴らした国文学主任教授の岡崎義恵、国語学の山田孝雄等に学び、昭和一〇年卒業。その後一年ほど東北大の副手、そして、わが母校岩手中学に来られたのは昭和一二年三月。おること三年にして、一四年四月東北大図書館に勤務。二一年宮城県立女専教授となり、学制改革で東北大助教、さらに教授となる。三〇年の四四歳頃、「文芸における写生説の研究」で文学博士。

先生は岡崎義恵の文芸学の継承者といわれたが、文芸学とは、当時の国文学界は文献学と考証に終始していたが、これに対して文芸自体に美学的見地から解析する新しい方法を取り入れた学問であつた。

至文堂の国文学専門誌(四〇年七月号)に

よれば、「大学の広い構内を朝夕必ず散歩する。まさにカントの如くである。何時何分にはどこを通りどの角を曲がる、ということまで決まっている。眉間に深い縦じわを刻み、禅僧のような和服を着て、時計の針の如く歩くのだ。

官舎住まいの奥さんたちは、「それまた北住先生が来た。坊や、学校へ行く時間ですよ」と子供をうながした。先生の散歩は官舎地区の名物であつた」と書いている。

岩中に勤めていた昭和一三年頃は、散歩する習慣があつたかどうか、聞いたこともなかつた。

先生は私ども一年の時、第三応援歌を作っている。ここに最初の一節を記しておく。

杜陵の辺幾歳か

磨きし劍今とりて

雄図に燃ゆる若き子等

戦の庭にいざや征け

地を蹴て進むその意気を

比べても見む石桜に

上級生からこの歌を元氣よく歌えと気合をかけられたことが懐かしい。

終わりに、先生の主な著書をあげておく。

「写生説の研究」(昭和二八)「写生派の歌人」

(昭和三四)「写生俳句及び写生文の研究」

(昭和四八)。国文学界において「写生説三部作」といわれて名著であり、日本学士院賞

も受賞している。昭和六三年五月、七六歳で逝去された。

島軒十次郎先生



剣学一如

松本 友教 (旧13回生)

私どもは先生をシマケンさんと言った。剣道部に属していたので先生の教えを十分受けることが出来た。昭和一三、四年頃の先生は五〇代であつたらうか。とにかく一番円熟していた時期のように覚えている。

先生は岩手武徳会に所属し、剣道段位はたぶん五段か六段ぐらいだったかと思う。北辰一刀流の流れを汲む剣風だと言われた。

性格は温かく決して授業中や稽古指導中に怒鳴るようなことはなかったし、生徒を嘲るようなこともなかった。

剣道の基本を大事にしてその基本が体になじむようにじっくりと教え、荒稽古をして無理に先を急ぐようなことはなかった。これが三浦正夫先輩や宮静孝先輩のような一流剣士を育て上げたのかもしれない。よくシマケンさんは弟子の育成において県下随一という声を聞いたものだ。

先生の言われたことで思い出すのは、「やせがまん」ということ。当時、冬の行事で武

道の寒稽古があつて、酷寒早朝の五時から六時まで二週間行われた。

ある日の稽古の終わつたとき生徒たちに「おまえたちは、早朝寒いところつらいか、たいていはヤセガマンで来ているはずだ。そのヤセガマンでいいのだ。恥ずかしいことはない。この我慢から本物になつて行くものだ。」この言葉は、私の人生の幾つもの曲り角で思ひ出され、励まされた。

また「若い者は暇のない生活をするものだ。暇を持って余すことのないよう目的をもつて暮らすことだ。」と言われた。

また、あるときは「剣道を学ぶ者は学業を怠つてはいけない。剣と学と心とを磨いてこそ本当の道を歩むことが出来るものだ。」とも言われた。私などはなかなかその通りには行かなかつたが、いい教えだと思つていたら、何十年経つても心の奥底に鮮明に残っている。

先生は竹刀や木刀で形の技を磨くとともに実の技をも重んじた。つまり、真剣(日本刀)による試し切りを体験させた。太い青竹を藁で巻き、一晩水に浸したものを台に載せ、エイと切り下ろすものだが、これを剣道部の二年生までやらせた。

精神を統一しなければ真二つに切ることは出来ない。試し切りを通して、「真の心」を磨くことに狙いがあつたのかもしれない。

先生はまたすばらしい「のど」の持ち主であつた。よく稽古の終わつた後、剣道で鍛えた声で漢詩を朗々と吟じた。辺りをはらい鎮め、聞く人の体にしみ入り心を洗うようであつ

た。今風の優美な歌謡調の吟じ方ではない。幕末から明治あたりの古典的な吟じ方であつたが「学風剛健夙に名を挙ぐ」とか、頼山陽の「鞭声肅肃」などはまだ耳に残つていて懐かしい。

小林 博先生



ロッパさんの思い出

菊地 武男 (旧13回生)

小林先生・通称「ロッパさん」。中背で、小太り、丸顔で目が小さく、度の強い眼鏡をかけ、革のスリッパをバタつかせながら、階段を昇り降りする姿が今でも目に浮かぶ。恐らく、当時人気役者の古川ロッパによく似ているので、この愛称がついたものと思われる。

先生は、確か昭和一四年に、歴史の教師として着任され、私たちが五年の時は担任として、そして進路指導担当としてお世話になり、またいろいろとご迷惑をおかけしたと思つている。当時、四〇代前半ではなかつたらうか。先生の授業はとても楽しく、講談調の語り

小笠原哲治先生

口はその時代の事象を彷彿とさせるものがあり、私たちをその世界に引き込んでしまいたい時間の経過が短く感じられた。

こんなわけで次の歴史の時間が待たれるほどであった。

われわれの在学中の昭和一三年から一八年と言えば、まさに太平洋戦争の時代であり、「三月一〇日」は、日露戦争で勝ったことを記念し、「陸軍記念日」とされていた。

この日は、小国の日本が、いかにして大國ロシアに勝利を得たかの講演がしばしば行なわれた。

ある年に、小林先生が講師として壇上に上がり、満州国（現在の中国北部）の大地図を背に、日本軍総司令官の大山巖大将と児玉源太郎参謀長が、いかにしてロシア軍総司令官クロパトキン將軍指揮の大群を打ち破ったかのお話をされ、血気盛んな当時のわれわれは、身を乗り出して聴いたことが強く印象に残っている。（この時の作戦の様子は、司馬遼太郎の名著「坂の上の雲」に詳しく述べられている。）

先生は生徒を指導するのに、大きな声を張りあげたり、殴ったりすることはほとんどなかったように思う。

これは先生の人柄と青年心理をよく把握された指導によるからではなかったろうか、いずれにしてもわれわれは、大沢川原のお宅に押しかけ、お菓子などをご馳走になったことを懐かしく思い出されるのである。



あの頑固さが好き

宇夫方康夫（新6回生）

高校二年生の秋だったと思う。美術部に席を置いていた僕は、放課後いつものように図画教室で先輩達と一緒にキャンバスに向い、夕日に映える岩手山を描いていた。その時小笠原先生が見えて僕達が描いている絵を批評してくださった。

当時先生は岩手山の絵をたくさん描いておられ、よく個展も開かれていたので、岩手山の絵でよく知られた先生であった。普段あまり批評することもなく、いつも好きなようにのびのびと描かせてくれる先生であったが、この時は余程機嫌が良かったのか長い時間いろいろなお話をしてくださった。

話はいつか僕達の絵から離れてマチスやピカソの絵の話に移って、その芸術性の話になった。

どんな話になったか詳しくは覚えていないが、生意気にも僕は先生に反論して譲らなかつた。先生も本気になって譲らず言い合いになつた。先輩達は呆気にとられてただ二人の言い

合いを聞いているだけだった。遂に先生は声を荒げて教室を出て行ってしまわれた。今思うと、十六、七のなんと憎つたらしい小生意気な餓鬼だろうと思われたに違いない。

それ以来、つまり二年生の後半から卒業するまで図画の点数はいつも七五点だった。図画の時間真面目に一所懸命描いても、あるいはまったく描かずにわざと授業をサボって遊んでいてもいつも決って七五点なのだ。授業をサボっていても、放課後いつも図画教室で油絵を描いていたのを見ていて、それで七五点もくれたのかも知れない。

卒業後東京へ出た僕は何年も先生にお会いすることもなく、音信不通の失礼を重ねていたが、昭和五十一年に盛岡へUターンした僕は先生が入院されていると聞いて数人の同級生とお見舞に伺った。

病床の先生に長い間のご無沙汰と、昔の生意気を詫びようと思っていたが、顔を合わせるとすぐに先生の方から先に、聞きとりにくい弱々しい声で「成功おめでとう」と瘦せた両手で僕の手を握ってくれた。

僕は声を出せなかつた。これが先生との最後になった。

あの手の感触は今も忘れられない。普通高校から美術に関係する仕事に進んだ数少ない教え子が嬉しかったのかも知れない。

昭和五五年「山中先生を囲む会」を我々同級生（四六会）で聞いたことがある。山中先生は昭和二七、八年当時教頭でクラス担任でもなかつたのだが、何かと思ひ出の多い先生だったので、ぜひお会いしたいという声が多

山中順三先生



血の通った警策

松見 得明 (旧1回生)

去る一〇月二七日、盛岡ターミナルホテルにおいて石桜同窓会総会並びに懇親パーティーが開催された。今年は仙台から佐藤伸夫さん(新4回生)の来演を得て賑やかなパーティーになった。更に嬉しかったことは山中先生がお見えになったことで、同窓生一同「来てよかったです。山中先生に会えるなんて。」と喜びをあらわにし、中には総会をサポートロビーで先生を囲んで話し込んでいた連中さえあった。

パーティーの席上、先生に一言ご挨拶をお願いしたところ一寸ためらっておられたが、やがて壇に立たれ、「今度来たのは、皆さんに会うのもこれが最後だと思ってやってきた。今日学校に行ってみたら、施設も設備も立派な素晴らしい学校になっていた。又皆の元気で活躍している姿も見ることができて、こんなに嬉しいことはない」と喜びを述べられておられたが、突然杖をあげて某君の方を指し、

「君はいつか何かに私に殴られたことを書いて

く、遠く千葉の我孫子からおいで願った。

その折り、先生への感謝の気持ちをはか形で贈ろうと幹事会で協議され、教師時代もつとも親しくされていた先生が小笠原哲治先生だったと聞いて、小笠原先生の絵を贈ろうということになった。

予算も少ないことから数人で亡き小笠原先生のお宅に伺い、先生の奥様に事情をお話したところ「山中先生に貰って頂けるのなら本人も嬉んでくれるでしょう」ところ快く譲ってくださった。

当日山中先生は「教師時代、特に校長になってからは孤独だった。そのなかで小笠原先生だけがよく話しかけてくれて親しくしていた。ほんとうにありがとう」と大変嬉ばれ、荷物になるから後でお送りしますと申し上げたが、「いや、これは持って帰る」とおっしゃって不自由な足にもかかわらず、大事そうに手に抱えて列車に乗られたのが思い出される。

人生訓がいつまでも

斉藤 裕 (新6回生)

人生において、良い師に恵まれることほど幸せはないと思われる。その点で小、中、高校大学と実に恵まれたと実感している。

終戦後、めまぐるしく変わる学制の中で、充実した教育を受けられるのは岩手中学しかないという小学校の恩師の薦めで、敢えて選抜試験を経て中学校に入った。その時が小笠原哲治先生との出会いである。(勿論担任であった)奇しくも桜城小学校の最初の担任

は奥様の千代子先生であった。

哲治先生の「教え」は徹底した人生訓である。まず人は前を見て生きて行かねばならない。そのためには強い克己心がなければならぬ、というのがその根底であった。

朝のホームルームでいつも聞かされる言葉、それは「為せば成る、為さねば成らぬ何事も、成らぬは人の為さぬなりけり」と「我に七難八苦を与えたまえ」であった。

これが当時斬新な中高一貫教育を目指した岩手中高生だった我々に勉強させる大きなモチベーションとなっていたような気がする。

絵画の教師としての先生は、勿論著名な画家であられたのでなかなか手厳しかった。技巧に走る小生の絵は「心が無い」と批評されもつと素直に感動を色にするようにアドバイスをされたものである。

先生の好きな画家はかのゴッホであり、何故か当時の小生には、先生の絵とは対極にあるように感じられた。しかし、晩年の先生の絵は突然に色が変わり、黒が随所に太い影を彩った。病床に先生を見舞った時にその事を申し上げたら、にっと笑われた。

今、師と徒とはどちらも歩み寄れず、精神教育などは進学の前には二の次。ここから出発している日本の社会は何か狂っているような気がしてならない。

今ほど哲治先生のような人物が必要なのでは？

ていたが、そんなに殴つたかな。覚えていないが、痛かつたか？」と言われた。

すると某君は大きな声で、

「ハイッ、宿題をやつてこないたびに弓の矢で作つた筈でコツンとやられました。痛かったです。今でも覚えています。そのおかげで卒業できました」と応えた。

と、それに和するようにまた一人「私もですッ」と手をあげた。

とたんに爆笑がおこり拍手がわいた。

先生は「そうだったか、卒業できてよかったな。では挨拶もこれで終わりにしよう」とニコニコしながら席にもどられた。

乾杯があげられ、佐藤さん（芸名・城千隼）の演奏にうつり、パーティーが賑やかになつていった。

ふと見ると先程の某君とその同期生と思われる数人が先生のところに挨拶にきて、記念写真をとシャッターをきっている。なるほどと思つて見ていたら、そればかりではない。次々とやつてきては撮影の順番を待つている。羨ましい情景であつた。

先生在任四十有余年の間にあつて幾たびかふるわれたその筈は、単なる懲罰のためのものではなく血の通つた警策の筈であつたのである。

さらばこそこうして青春の往時が懐かしまれ、先生のもとに寄り集まるのであろう。

近時教師の暴力が取沙汰されることしばしばであり、その否定さるべきこと当然至極である。

しかし前述のような情況にあることをどう

解釈したらいいのか、複雑に錯綜している人間社会にあつては常に是を是とし、非を非とすることが妥当だと言いきれないものがある。おなじ筈でもそれによつてあるいは生かされ、あるいは将来を誤ることもなるのである。山中先生の場合のそれは生かされたものであり、幸いなことであつた。しかしして岩高にはその筈を自らの警策として受け容れ、愛の筈として生かし得る生徒の体質のあることもまた幸なるかなである。

異色の教師、山中先生

藤原仁左衛門（旧14回生）

私の入学したのは昭和一四年で、この頃は個性豊かな生徒思ひの先生方が何人もおいになつた。思ひ出は尽きないが、その中で私の人生にとつて決定的な方向付けと自信を与えてくださったのは山中先生である。

私は盛岡中学を受験しあつさりとはねられた。そこで岩手中学校の二次募集に応募して拾つてもらつた者である。田舎でのんびり育つた私は必死に勉強したつもりであつた。しかし、盛岡の生徒は力は付いているし要領も良く、またよく発言した。

私なりに「予習して授業にでる。帰つて復習する」これを忠実に実行するようにした。しかしこれは至難の技である。とても時間が足りない。その上に山中先生はその日学習した文章を暗誦させるのである。

私どもの時代の英語は週六時間で毎日英語の時間がある。従つて毎日英語の暗誦がある

わけである。これが結構分量があつて参つた。それに先生は、暗誦の途中でひっかかつて続かないと教室の角においてあつた竹刀立てからいきなり竹刀を取つて、「お面」とばかりにグアンと頭に振りおろす。竹刀はしなうので頭に巻きつくようにして後頭部に回り込み、ちよんまげのような長いこぶが出来るのだ（人によつては鞭だという）。痛いも痛いし、格好も悪い。閉口したものである。

これが恐くて必死に暗誦した。ある生徒はこのしごきに耐え切れず中途で退学して高等学校に戻り、二年後盛岡農学校に入りなおした。

先生は、時々口をキュウツと（いつも英語を話すときんな口の格好になるのかと思つた）横一文字に結んで、目を細くして茶目つけたぷりな微笑みを浮かべたかと思うと、背の小さい生徒の学生服の背中に竹刀を入れて立てるのである。背が低いので足が床から持ち上げられ転びそうになる。必死に爪先を伸ばして床面をさがす。次はわが身ということがわかりながら笑つたものである。

私は、身長の関係で竹刀を背中に入れられることはなくとも、この長こぶのお仕置きはいつも目の前にあつて本当に恐かつた。英語の授業が終わつた休み時間から暗誦を始める。汽車の中で、降りてから家までの歩く時間、家で予習の合間にそして次の日駅までの歩く時間、汽車のなか駅から学校までの歩く時間、そして休み時間兎に角使える時間は、すべて英語の暗誦である。そして愈々英語の時間がくる。

い

この頃、ようやくなんとかひっつかからずに出来そうに思われてくる。このように一年生の一学期は正に英語の暗誦にかけて暗誦に暮れていった。こうして手にした一学期の通信表は、かつてない程よい結果が書かれていた。

私は、このことを通して勉強すること、努力すること、そして何より「やれば出来る」ということを体得させられた。

生徒に迎合せず信ずるところに従って徹底的に鍛えた先生。本当に良き師に出会わせていただいたものと思う。

文学者を志していたのでは――

佐藤 章（新2回生）

「おい、元気でやってるか」

大きな声なので、いつも緊張した。記者時代から文学館の仕事をしているこの二〇年は、忘れたところにひょっこりと山中先生から、この数年は「耳が遠くなつた、おまえの声がきこえないので、こっちで一方的にしゃべる」とえんえんと。

思えば私など山中先生にとって不肖の教え子。英語がきらいで、先生の英語の授業中にフランス語の「隠習」をし、期末試験の答案用紙にフランス語の単語を並べたり。

それが卒業してから、かわいがつてもらうという不思議。その底流を思うと、山中先生は文学者を志していた――と教師、生徒の間柄のうちに察していたのだろう。

文学館の仕事をするようになってからは、「いい仕事なのだから、一生けん命やりなさい

文学館がオープンすると「盛岡に行く際、必ず文学館に行くから」――の電話がしばしばだった。

その後、体が弱つたようで、いまだ実現していない。若き英語教師時代は外人も驚いたという英会話、文学への高い見識、生徒の才能、個性をいちはやく検知し、それを尊重するという秀れた教師像がいまになつてくつきりとしてくる。

新雪に覆われた岩手山と、その人柄がだぶつてくる。

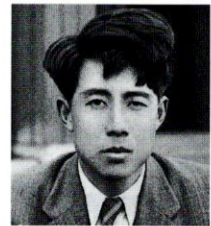
そんなに遠い日のことではない。私にとつて忘れられない「一行」の、電話がある。

「おまえ、詩人以外にはなるなよ」

あざやかに、あざやかに記憶した山中先生のこの「一行」。相変らず不肖の教え子は、いまだまともな詩を書いていない。

私の詩は詩歌文学館づくりだけになつてしまったようである。

戸嶋正夫先生



剛毅、清廉の師

池野 和夫（新2回）

私は昭和一九年四月旧制岩手中学に入學、二五年三月新制岩手高校卒業だから、戸嶋先生には六年間教わつたことになる。

入学式の折、一三〇名ぐらいの新入生を前に、その氏名を一人ずつ一気に読み上げる軍服姿の一人の教師の姿があつた。その凜として淀みなく読み上げる先生の姿勢をみて、ああ小学校とは違ふんだなと、緊張感を覚えたことを印象深く記憶している。その軍服姿が戸嶋先生だった。

母校へ県内のどこよりも早く昭和二年にはじめてラグビーを導入したのは広島英雄先生で、この方がいわば戸嶋先生の恩師である。

広島先生が岩手中学に赴任したのは昭和二年春で、日体（後の日体大）を卒業したばかりの血気盛んな教師だったようだ。

この年の秋初代校長鈴木卓苗先生の意向もあつて、10ケのラグビーボールを購入し、正課体育にラグビーをとり入れたと聞く。

昭和三年に岩手公園広場で学級対抗試合を

行い、これが県内初のラグビーの試合とされているが、このとき生徒の戸嶋先生はF・Bだった。

私達は一年の五月校庭でクラブ分けがあり、体格のいい者はラグビー部に入ったが、私の場合、城南小学校卒は殆ど自動的に水泳部に入るのが普通で、それに従った。

その後同級生の佐々木宏平（故人）と戦後二〇年の六月頃、ラグビーのボールで遊んでいて、いつの頃からかラグビー部に入ってしまった。

二一年には岩手県ラグビーフットボール協会が設立され、戸嶋先生は理事長に就任している。その設立記念試合というのが岩手医専グラウンドで行われたが、二一年の一〇月には戦後初の東北の中学のラグビー大会があり、われわれ岩中ラグビー部は秋田工業学校との試合のため、米を持参で一六名が遠征することになった。

私はまだ背も小さく補欠、荷物の見張番ということで建物の二階から見ただけで、佐藤進さんの弟光祐がF・B、35対0で負けた。

グラウンドは畑のようにボコボコしていた。このためか戸嶋先生はその頃、ガラガラ石の校庭でタックル練習を盛んにさせた。

本気のタックルをしない同年の村松正雄等は随分叱られたものである。

昭和二二年は私は旧制中学四年生だったが、体育の授業では戸嶋先生からラグビーの歴史と精神を学んだ。その講義は英国スピリットを十分に教え込もうというものだった。二二

年の頃からが、本格的なラグビーの技を学ぶ練習が重ねられ、それ以前は遊ばせているようなものだったと思う。

その後、家にグローブがある者は持って来いという事で、課外で野球をやりはじめた。佐々木芳彦（新2回）、関根淳一（新2回）等が野球をするようになった。あるいは戸嶋先生の脳裏にはやがて来る野球ブームについての先見性があったのかも知れない。

昭和二三年に新制高校に変わり、内丸の女子師範の校庭で高体連の開会式があり、部費二万円で作った慶応スタイルのラグビーのユニフォームを着て行進した。

昭和二四年に第二回高体連があり、黒沢尻工業のグラウンドで岩手高校は試合することになった。北上の菊池旅館が高体連の本部だったが、岩高生だけはなぜかそこに泊った。

平素は毅然としていた戸嶋先生だったが、やはり生徒を可愛いがる気持がそうさせたのかも知れない。

当時の戸嶋先生は大正二年生まれだから三五、六歳の働き盛り、正に頼もしい先生だった。随分敵しい先生だったと生徒だった誰もがいうが、私は体育の点数は九二点から九五点で通した。

昭和二四年は県内ではラグビー試合は相手皆〇点に押えたが、その年の秋、仙台で国体出場をかけた秋田工業との試合で、五〇対三で負けてしまった。

戸嶋先生は怒りとショックを隠せず、一月中旬に全国大会の予選もあつたが、その東北大へにも出場を許さなかつた。

昭和三〇年には野球部の小武方信一（新5回）田中義男（新8回）達が積年の夢を結んで甲子園に進む。

ラグビー、水泳、アイスホッケーは岩中以来の伝統で強いとされていたが、一方では時代は変わりつつあつた。

私はかつて佐々木孝平、村松正雄、藤根義慶等と同席の場所で、戸嶋先生に「野球部を作れば、他の部の力は弱くなる」と真剣に話したことがある。

生徒数が多くないところで、生徒の体位の層が厚くなければそれは当然と思つていたからである。

戸嶋先生は「バカヤロウ、全般のレベルを上げるのが学校教育である」と一喝、「お前達は何を言うか」と我々を叱つた。

たしかに教育者の道を歩んで来られた先生の頭にはすでにそういう確かな信念が生まれていたのかも知れないし、戦後の学校教育が変わつたのも事実だつたと思う。

剛毅一徹の戸嶋先生はその後円熟味を増していった。

昭和三四、三五年にラグビーで盛岡工業とせり合つて後輩達が負けたが、そのとき私は戸嶋先生の頬に涙がつたつて流れるのを見て、私は深い感慨に沈んだ。

県下の高校に、体育では岩高に戸嶋ありといわれ、長年に亘つて高体連理事長の任にあつた先生は清廉潔白、その気骨と覇気を永遠に失ふことなかれと私たちに教えて下さつたように思う。